

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「大学生活を充実に過ごすために…」：
新用法発生の契機に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): error, new grammatical usage, "jujitsu ni sugosu" 作成者: 金澤, 裕之, KANAZAWA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000543

「大学生生活を充実に過ごすために…」

——新用法発生の契機に関する一考察——

金澤裕之

横浜国立大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿は、現在まさに大学生生活のただ中にいる学生たちの一部が、「[大学生生活を] 充実に（または、させて）過ごす」という表現において、「充実に過ごす」という形式を採用しつつあるらしいことを、アンケートの結果より指摘するものである。そしてこの形式が、単なる思い違いや誤用ではないかもしれないという可能性について少しく考察するとともに、この現象に関しては、日本語学習者である留学生たちの状況が参考になるかもしれないという点についても言及してみる*。

キーワード：誤用、新用法、「充実に過ごす」

1. はじめに

ご覧いただければ分かる通り、本稿のタイトルは「大学生生活を充実に過ごすために…」というものであるが、このタイトルを見て違和感を抱いたり首を傾げたりした方は少なくないものと思われる。因みに、いわゆる三大新聞の記事データベースにおいて、検索の対象期間を「全期間」とした上で「充実に過ご（す）」の文字列を検索してみると、用例は1件も無い。（2014年3月27日時点。なお、同時に検索した「充実に過ご（す）」の場合は、同一の期間に、『朝日』47件・『毎日』44件・『読売』63件がヒットする。）

ところが、筆者自身も違和感を抱く、この「大学生生活を充実に過ごす」という言い回しが、実は、今まさにその生活のただ中にいる、当の大学生たち自身の一部においては、多分全く自然な（＝特に意識することもない）表現として使用されているらしいことが、アンケート調査から分かってきたのである。以下では、そうしたアンケートの実態を紹介するとともに、その背景について少しく考察を加えながら、もしかするとこの現象と関わりを持つかもしれない非母語話者である留学生たちの言語意識の状況をも併せて、検討を進めてみることにしたい。

2. 大学生を対象とするアンケート結果

筆者がこの言い回しを偶然耳にしたのは、正確な日には覚えていないが、昨（2013）年5月頃の、本務校におけるゼミの授業時間の中であった。一人の学部生（＝日本語母語話者）が何かの折にこの表現を使用したため、筆者自身大いに驚いて、他の受講者たち数名に確認したところ、

* 本稿は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（プロジェクトリーダー：相澤正夫）の研究成果である。また、2014年6月3日の国立国語研究所における同プロジェクト研究会での発表を元に改訂したものである。

「その言い方はおかしい」ということでその場では一致したため、当該学生の単なる覚え間違いかまたは勘違いとして、その日はそのまま過ぎていった。しかしその後、かなり以前に担当した留学生向けの作文添削の授業において、類似した例が存在したような記憶があったため、他の（受講者の多い）授業において、改めて日本人学生や留学生たちにこの言い回しについて確認してみたところ、日本人学生の場合は十数人に一人程度の割合で、また、留学生の場合は（対象数そのものは多くはないが、）かなりの割合で、「この表現を普通に使用する」という返事が返ってきたため、改めてきちんとした大学生対象のアンケートを行ってみることにした。

実施したアンケートの質問内容は、次の通りである。（ただし、それ以前から他のテーマを主たる目的とするアンケート調査を実施する計画を立てていたので、この「充実（ ）過ごす」の設問については、他の20問程度の質問項目の中に次の1問を、目立たない形で挿入させただけである。）

・次の文の（ ）の中に、適当なことば（1～4字位）を入れて、自然な文にして下さい。

Q：大学生生活を充実（ ）過ごすために必要なことは、……。

2013年の初夏から秋にかけて、比較的多くの大学（関東および、北海道と中国地方にある、国立および私立の5大学。そのうち、A・Dは共学校、B・C・Eは女子大学。）で実施することができたので、対象人数には大分バラつきがあるが、まずは実施順の大学別にして、その全結果を示してみよう¹。

表1 日本人大学生の記入状況（大学別）

大学	「して」	「させて」	「に」	計
A (%)	84 (61.8)	41 (30.1)	11 (8.1)	136 (100.0)
B (%)	29 (72.5)	6 (15.0)	5 (12.5)	40 (100.0)
C (%)	29 (63.0)	13 (28.3)	4 (8.7)	46 (100.0)
D (%)	70 (65.4)	23 (21.5)	14 (13.1)	107 (100.0)
E (%)	21 (61.8)	9 (26.5)	4 (11.7)	34 (100.0)
合計 (%)	233 (64.2)	92 (25.3)	38 (10.5)	363 (100.0)

この結果から分かる最も注目すべきことは、いずれの大学でも学生たちの一部においては、確かに「(大学生生活を) 充実に過ごす」という表現が全く普通の表現として定着しているらしいことである。またこのアンケートでは、最初の一般的質問で回答者の年齢(=生年)と性別と出身

¹ 例示した表現形のうち、「して」の中には「し」「しつつ」などを含み、「させて」の中には「させ」「させつつ」などを含む。ただし、それらの数は合わせても、その表現形全体の数パーセントである。

地（都道府県）を尋ねているが、結果から見る限りでは、いずれの面でも特に際立った特徴は窺えなかった²。

全体における平均の「10.5 パーセント」という数字は、もちろん一般的に見れば高いものとは言えないが、その以前は多分「0 パーセント」であった可能性が高いと予想されることを考えると、この「充実に過ごす」という言い方は、若者たちの間に、確実に「萌している」と言ってもあながち間違いではない状況にあるように、筆者には思われる。

3. この表現が生まれてきた背景への一考察

この「充実に過ごす」という言い方について、若者たちの間に生まれつつある「新しい表現」として認めていいのかどうかは、今後の推移を見守るしかない。また、こうした表現が（仮に）成立しつつあるとしても、それがどのような理由によって生まれてきたかについては、確実な推測は難しいと考えられる。ただし一点だけ、(「理由」というよりも,)「後付け」に相当するような特徴に当たるものと思われるが、少しく気付いた点があるので、それを紹介しておきたいと思う。それは、「- 実」という形をとる、「実」の字を後部要素に持つ、二文字の漢字熟語に関することである。

漢和辞典で「実」の字を引くと、その項目の最後に、「実」の字を後部要素とする熟語の例が多数示されている場合がある。ここでは仮に『新字源』（初版 1968・改訂版 1994、角川書店）を例にとると、次の 22 語が挙げられている。

果実・確実・結実・堅実・現実・故実・口実・史実・事実・写実・充実・情実・真実・
誠実・切実・着実・忠実・篤実・内実・如実・無実・名実

また、『日本語逆引き辞典』（初版 1990、大修館書店）の「じつ [実]」のまとめの部分 (p. 385) には、もう少し多くの熟語の例 (32 語) が挙げられているが、一般には用いられないことがないと思われるいくつかの例を除くと、上記 22 語以外としては、「虚実・質実・信実・不実」の 4 語を加えることができそうである。

さて、以上の計 26 語について、それを文法的な性格 (= 品詞性や接続の仕方など) から分類すると、次のように分けることが可能ではないかと思われる³。

X: 名詞——果実, 虚実, 現実, 故実, 口実, 史実, 事実*, 写実*, 情実, 真実, 内実,
無実*, 名実 [以上, 13 語]

Y: 形容動詞 (名詞) ——確実, 堅実, 質実, 信実, 誠実, 切実, 着実, 忠実, 篤実, 如実*,
不実* [以上, 11 語]

Z: サ変動詞 (名詞) ——結実, 充実 [以上, 2 語]

² 属性差の中の一例として、集計が比較的容易な性差については、全体をまとめて示すと、次の通りである。

「に」の割合——男性: 11.9% (126 人中 15 人), 女性: 9.7% (237 人中 23 人)

男性の値の方が少し高くなっているが、この点の理由については不明である。

³ 分類した用例のうち、右側に「*」を付したものは、辞書などの記述においても、一部判断の分かれる語である。

Xの名詞の場合は措くとして、Yに含まれる語は、連体形である「△実な」の形をとって「△実な○○ (=名詞)」という連体修飾表現に使用されたり、連用形(別形)である「△実に」の形をとって「△実に□□ (=動詞)」という連用修飾表現に使用されたりすることが多い語群であると考えられる。一方、Zに含まれる2語のうち、「結実する」については、「～に結実する。」などといった述語となる用法は多いと思われるが、「結実した○○ (=名詞)」のような連体修飾表現や、「結実して□□ (=動詞)」といった連用修飾表現に使われる例は、あまり多くはないのではないかと考えられる。それに対して「充実する」の方は、「(「結実」の場合とは逆に、)「～に充実する。」などといった述語となる用法はほとんど無いように思われるが⁴、「充実した○○ (=名詞)」といった連体修飾表現に非常によく使われることは間違いないと考えられる。もちろん、そこからの展開で、「充実して□□ (=動詞)」という形の連用修飾表現が一般に使用されるわけだが、上で見てきた通り、分類のYに属する「△実」という形をとる多くの、そして一般に使用頻度の高そうな二文字の漢字熟語群が、連用修飾表現において「△実に□□ (=動詞)」という形式をとるということから、それに対する一種の(単純な)類推により、「充実」の場合にも「充実に□□ (=動詞)」という形式が無意識的に採用されて、例えば「(毎日を)充実に過ごす」といった表現が、一部に受け入れられつつあると言えるのではないだろうか⁵。

なお、本論文の筆者は金澤(2008)の中で、現代における日本語の「ゆれ」や「誤用」の代表格とも言われる「ラ抜き」や「サ入れ」の現象について次のように述べているが、ここでの考え方は、この節において述べてきた「充実に」形式の出現の背景に関する捉え方と、軌を一にするものである。

因みに、「ラ抜き」や「サ入れ」の例を考えてみると、可能や使役の意味を表わす「れる／られる」や「せる／させる」といったことば(助動詞)が、動詞の活用の種類(例えば、五段型とか一段型とか)によってどちらか一方が選択されなければならないという状況を「不合理」と考え、それに対して、活用の種類に関係なく「レル」や「サセ(テイタダク)」を単純に接続させることを「合理的」と考える捉え方と共通するものなのである。(金澤 2008: 9-10)

4. 留学生(日本語学習者)における状況

先に2節で示したアンケートについて、むろん全体の数は日本人大学生の場合よりかなり少なくなるが、この時同時に、複数(前記の5大学のうち、Bを除く計4つ)の大学あるいは大学院に所属する留学生たちをもインフォーマントとすることができたので、その記入結果を2節の場

⁴ただし、「……が充実する。」「……を充実する。」といった形式の表現は、普通に見られるものである。

⁵なお、検索ソフト『少納言』を利用した「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」の検索によれば、「充実に過ご(す)」という形の用例はなかったが、次のような例は1件存在した。

・残りのマタニティライフを充実にお過ごしください。(Yahoo!知恵袋, 2005)

また、「充実な○○ (=名詞)」という表現に関しても、独立した形では無く、この例の場合には先行する「快適」からの影響を受けたものと考えられるが、次のような例は存在した。

・……、きっと快適・充実な生活を達成できると思います。(広報紙, 2008)

合と同様の形で示す。アンケートの方法や内容については、日本人への場合と全く同じものである⁶。

表2 留学生の記入状況

	「して」	「に」	その他	計
留学生 (%)	3 (13.0)	19 (82.6)	1 (4.4)	23 (100.0)

ここに現れた「充実に」の82.6%という数字は、「はじめに」で示した新聞の検索結果などから考えると、かなり驚異的な結果といえることができるのではないと思われる。

なお、インフォーマントの日本語レベルに関して、今回は特に厳密な調査はしていないが、ここで対象とした学生たちはその多くが正規の学部生や大学院生で、筆者による日本語学関係の授業を受講していた者たちであり、実際に話をしてきた時の感触なども加味すると、彼らのレベルは明らかに一般に言う上級以上であると考えられ、その中には多分に超級に近いと考えられる人々も含まれていた模様である。

また、彼らの国籍（多分、母語も）についてはアンケート結果から分かるので、それをまとめて示すと、次の通りである。

中国 = 12名、韓国 = 9名、インド・インドネシア = 各1名

現在の多くの大学・大学院の状況からも分かる通り、結果的にはそのほとんどが、中国語または韓国語の母語話者だった。

この結果から分かる最大のことは、一部に超級レベルの者をも含む日本語レベルの高い留学生たちが、「充実に過ごす」という言い方を、全く自然な表現として使用（または、意識）しているらしいことである。この傾向は、中国語母語話者の場合にも、韓国語母語話者の場合にも変わりはない。

その背景についてであるが、彼らのような日本語学習者の場合は、先に3節で示した「-実」という漢字二字の熟語の場合の、連用修飾表現における「△実に」という形式の汎用性が、大きく関わっている可能性は十分に考えられるように思う。なぜかと言えば、彼らのような、教室習得の環境の中でレベルを上げてきた学生たちにとって、語彙的な面の場合などでも、既有知識からの量的（あるいは、合理的）な類推というものが十分に働いている可能性が高いと考えられるからである⁷。

⁶ 筆者の担当する授業の中で実施したため、対象となったのは、ほとんどが文学部や教育学部系の、日本語・日本文学関係のコースに所属する学生たちである。

なお、凡例中の「その他」の実例は「よく」というものであり、日本人学生の場合には25%程度の割合で見られた「させて」の記入例はなかった。

⁷ こうした点について野田高史氏は、野田ほか（2001）の「第3章 学習者独自の文法の背景〈4〉学習者独自の文法の役割」の中で、次のように述べている。

・学習者の文法は理にかなったものである

この章では、学習者独自の文法が生まれる原因を探るために、3つの事例を見てきた。過去丁寧形と、助詞の「に」と「で」と、無助詞である。これらの事例から分かるのは、学習者独自の文法は、決してでたために生まれたものではなく、必然性があるて生まれた、理にかなったものだという事である。

アンケート後、インフォーマントのうち、明らかに超級に近いと考えられる一部の者に対してフォローアップ的にインタビューをしてみたところ、中国語の場合でも韓国語の場合でも、3節で挙げたような「-実」の形をとる漢字熟語の多くが存在しているとのことであった。さらに、その文法的性格や振舞い方では、日本語の場合と同様の純粋な名詞の場合は別として、形容(動)詞として連用修飾表現に使用される場合には、ほぼ一様の表現形式をとっており、例えば「充実」だけが特殊な振舞い方をすることはないとのことであった。

筆者は、前節でも挙げた金澤(2008)において、「日本人(母語話者)における言語変化の向かう先が、現時点での日本語学習者における実態の方に近付いていくように見える場合が少なくない」(p. 274)と記したが、今回の「充実に(過ごす)」という形式の出現の場合についても、それと同様の流れの中にあるのではないかと考えている⁸。

5. おわりに

2節の中のアンケート結果(=表1)で示した通り、現役である比較的多数の日本人大学生たちの使用意識における、「(大学生生活を)充実に過ごす…」という言い方の10.5パーセントという数字は、言語変化における「変化のS字カーブ」の考え方からすれば、この表現が今まさに「臨界期」にあることを示しているように筆者には感じられる。周知の通り、臨界期にある表現の場合、次の段階として考えられるのは、次第に(あるいは、急激に)消滅してゆくか、次第に(あるいは、急激に)増加してゆくかのどちらかである。この「充実に過ごす」という表現が、そのどちらの方向に進むかについては現時点では不明であり、今後の調査結果を待つしかないが、もしも後者である増加の傾向を辿ってゆくとしたら、(今回3節の中で示したような説明が妥当であるかどうかは兎も角として、)何らかの合理的な理由や説明が用意される必要があると言えるのではないだろうか⁹。

参考文献

- 金澤裕之(2008)『留学生の日本語は、未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム—』東京：ひつじ書房。
 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』東京：大修館書店。
 白川博之(2010)「書評：金澤裕之著『留学生の日本語は、未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム—』
 『日本語の研究』6(3): 126-131.

〔中略〕

学習者独自の文法が理にかなっていないということは、それを裏から見れば、学習者の「誤用」は、目標言語(今の場合は日本語)の弱い部分、つまり、不合理だったり、複雑だったりする部分を突いて現れると言うこともできる。ちょうど、地殻の弱い部分に火山の噴火口ができるように。(野田ほか 2001: 60-61)

⁸ なお、この辺りのことに関しては、白川博之氏による拙著に対する書評(=白川 2010)の中に、分かりやすい言及がある。

⁹ この現象について、本稿では「充実に(過ごす)」という一つの具体的な例に限って考察を進めてきたが、同様の現象は、他の二字漢語サ変動詞(例えば「安定」など)の場合にも起こり得ることが考えられ、漢語(動詞)の品詞体系をめぐる問題にも展開し得る可能性があることを付け加えておきたい。

Daigaku seikatsu o jujitsu ni sugosu tameni... :
A Study on What Triggers the Emergence of New Grammatical Usage

KANAZAWA Hiroyuki

Yokohama National University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This paper examines the results of a questionnaire that show that some university students, in the course of their college lives, seem to be adopting the form “jujitsu ni sugosu” instead of “(daigaku seikatsu o) jujitsushite or jujitsu sasete sugosu” (I make the most of my college life). I also discuss in some detail that this form may not be caused by a misconception or error, and I attempt to point out that this phenomenon might be clarified by observing foreign students who are learning Japanese.

Key words: error, new grammatical usage, “jujitsu ni sugosu”